

が見當る位である。

D 部 類 此の中では三個の研磨器が目立つ。特に大型のものは 80cm 位のものまで、研磨し得るものであるに拘らず、一度も故人によつて使用されて居ない。他に荒播機と云ふ珍しいものもあるが、以上の四個の器械については、詳しくは故人が以前「天界」誌上に掲載されたから繰り返さない。ここで一言加へたいのは、故人が鏡面製作の時に常に、180#C. 3FC. 303# 金剛砂 (5—8分程度) 及び 606# 金剛砂 (20—30分程度) の僅か四階段で作業されて居た事で、素人の方々には稍や奇異な感を持たせる。猶ビツチが相當あるが、これは簡單には云へない。

E 部 類 は所謂雜具で、別段云ふ程のものもない。

以上で大畧に説明を致しました。目下小生は 8cm 級の對物 Lens と 13cm の豫備鏡を製作にかかつて居ります。勿論目的は寫眞玉の製作であります、今暫く研究が必要です。(木邊生)

遺 稿

光學研究室より スペクトロヘリオスコープ用の口徑10センチ焦點4米の長焦點鏡一對は焦點距離を揃へる事が第一の困難だが216號が393センチ、217號が395センチの二個に出来上つた。これだけ長くなると球面と拋物線の差も分らず、大體球面近い位にしか出来ない。反射鏡熱が大分下火になつて。従つて自分ので作るものも少いが、仕事が少くなると下手になるし、偶に磨ると指を傷めて困るので、少々廣告して仕事を増す事にした。一週に、大小取りませ、一個やらないと、ぢきに下手になる。

(中村氏の遺稿より)

新 星 の 發 見 !!

コペンハーゲンよりの報知によると、去る3月20日、白國ユクル天文台のデルボルト、アレンド兩氏は、双子座に一新星(Nova Geminorum 1933)を寫眞で發見した。光度は11等級であつたが、其の後、急に減光して、一週間の後には17等級以下に降つた由。